

2018年横浜ナザレン教会 復活後第四主日礼拝

「聖書がわかる」

ルカによる福音書 4:14～30

【聖書箇所】

14 イエスは“霊”の力に満ちてガリラヤに帰られた。その評判が周りの地方一帯に広まった。15 イエスは諸会堂で教え、皆から尊敬を受けられた。16 イエスはお育ちになったナザレに来て、いつものとおり安息日に会堂に入り、聖書を朗読しようとしてお立ちになった。17 預言者イザヤの巻物が渡され、お開きになると、次のように書いてある個所が目にとまった。18「主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、／主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、／捕らわれている人に解放を、／目の見えない人に視力の回復を告げ、／圧迫されている人を自由にし、19 主の恵みの年を告げるためである。」20 イエスは巻物を巻き、係の者に返して席に座られた。会堂にいるすべての人の目がイエスに注がれていた。21 そこでイエスは、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と話し始められた。22 皆はイエスをほめ、その口から出る恵み深い言葉に驚いて言った。「この人はヨセフの子ではないか。」23 イエスは言われた。「きっと、あなたがたは、『医者よ、自分自身を治せ』ということわざを引いて、『カファルナウムでいろいろなことをしたと聞いたが、郷里のここでもしてくれ』と言うにちがいない。」24 そして、言われた。「はっきり言うておく。預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ。25 確かに言うておく。エリヤの時代に三年六か月の間、雨が降らず、その地方一帯に大飢饉が起こったとき、イスラエルには多くのやもめがいたが、26 エリヤはその中のだれのもとにも遣わされないで、シドン地方のサレプタのやもめのもとにだけ遣わされた。27 また、預言者エリシャの時代に、イスラエルには重い皮膚病を患っている人が多くいたが、シリア人ナアマンのほかはだれも清くされなかった。」28 これを聞いた会堂内の人々は皆憤慨し、29 総立ちになって、イエスを町の外へ追い出し、町が建っている山の崖まで連れて行き、突き落とそうとした。30 しかし、イエスは人々の間を通り抜けて立ち去られた。

1 会堂の礼拝

今日と来週の主日礼拝でルカによる福音書4章14節以下から共に御言葉を聞いていこうと考えています。今日は前半部分が中心です。今日のルカによる福音書の箇所では、主イエスがどのように伝道の業をお始めになったか…ということが描かれています。

主は、ご自分がお育ちになったナザレに行かれて、「安息日にいつものように会堂におはいりになった」。主イエスは幼い時から信仰の教育を受けられました。12歳になると、ユダヤの男の子の通例として、一人前の信仰者として扱われました。その頃から、主イエスは安息日、今でいうと土曜日ですが、毎週土曜日になると、会堂にられました。そして顔をよく知っている、自分の村の仲間たちと一緒に神を礼拝なさいました。

会堂、シナゴークと呼ばれるものは、世界中、ユダヤ人のコミュニティのある町ならありました。そして神の民の信仰生活、また社会生活の拠点でありました。礼拝の場所、神の言葉を聴き、祈りを重ねる場所、また時には、今日でいう公民館に似た働きをしていました。エルサレム神殿で神を拝むことができない者たちが集まり、聖書、今日でいう旧約聖書の言葉が読み聞かされ、その説き明かしを聴き、詩篇を歌い、祈りを捧げていたのです。幼い時から礼拝に慣れておられた主イエスは、実際に伝道をお始めになった時も、先ず会堂で説教をなさったようであります。主イエスの礼拝が福音書に丁寧に記されているのは、ただ一度です。が、もちろん、この後何度でも安息日には、どこの地にいても人々と共に礼拝することを喜ばれたと思います。そして、その会堂の礼拝は、私たちが今捧げているこの礼拝の起源にもなりました。

2 開かれた聖書

私たちの礼拝の起源とも言われる会堂の礼拝。それはどのように捧げられていたのか、どのような佇まいであったのでしょうか、色々と想像されます。しかし、そのような事をルカは一切書き記していません。もっと大切な事がある…と言っているようです。

大切なこと…17 節です。「**会堂に入り、聖書を朗読しようとしてお立ちになった。預言者イザヤの巻物が渡され、お開きになると、次のように書いてある箇所が目にとまった**」。

当時の聖書は、今日のように、一冊にまとまっているわけではありません。聖書の管理をする専門の人がいたようです。主イエスが、預言者イザヤの書を渡してくれ…とご自分で要求なさったのではないかと思います。管理する人が主イエスの求めに応じてイザヤ書の巻物を手渡したのでしょう。誰が、どんな言葉を語るよりも先に、聖書が開かれたのです。何よりも先ず礼拝で大切なことは、聖書が読まれるということだったと分かります。

教会によっては美しく装飾され、縦50センチもあるような大きな聖書が講壇の上や朗読者の壇の上に置かれています。そして礼拝の時に、司式者または朗読者がその大きな聖書を開いて朗読します。つまり礼拝の時、聖書は開かれているのです。聖書はどこに置かれても、どんなに美しく重々しく飾り立てられていようと、閉じられていては何の意味ありません。開かれ、読まれる、直ちに説教によって説き明かされます。そこで、わたし達が、説教者も説教を聞く者もどういう体験をするのでしょうか？

3 「聖書がわかる」

先ほど交読文で共に読み交わした詩編119篇。そこに「**み言葉うちひらくれば光を放ち、愚かなる者をさとからしむ**」という一文があります。これは詩編119篇130節の文語訳の言葉です。新共同訳では、「**御言葉が開かれると光が射出で／無知な者にも理解を与えます。**」ですが、私は文語訳の方が言葉に動きがありダイナミックで、本来の意味がよく通じると思いますので、文語訳の方を引用します。

み言葉の殻が打ち破られる、そして開かれる。そこに真理の光が放射される。そのようにそれまでわからなかった事、見えなかったものが見えるようになる、わかるように

なる。私たちが叩き割るのではない。私たちが聖書を開きその言葉を聴くとき、聖書の言葉そのものが、向こう側から開き、向こうから扉を押し開いて光がそこから射してくる。その光の中で、愚かな私が、わたし達が、神の知恵に生かされるようになる。つまり「聖書を判る」のです。「ああ、今、私は聖書がわかった！この言葉の意味がわかった」と膝を打ってそう叫ばざるおれなくなるような出来事がこる。これを「うなずきの体験」と言った人がいます。いいえて妙だと思います。その体験こそ信仰を養う経験となり、信仰を作りあげていくのではないのでしょうか。そうして礼拝が成り立つのです。聖書がわかった、という出来事が起こる、それは神の御手の介入です。御言葉が打ち開く…それこそが礼拝では決定的なことではないのでしょうか。

4 神の国の告知

さて、主イエスは、伝道の業の最初の説教で果たして何を語られたのでしょうか。

「神の国は来た」と告げられたのです。マルコによる福音書の1:15で、「**時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ**」とあるとおりです。主は、「神の国は今ここに来ている」と告げられました。これが主イエスの伝道の第一声であり、その後、繰り返して語られた主イエスの説教の主題でありました。このルカによる福音書4章は、マルコ福音書と同じ宣言の言葉は記しません。が、主の日常の伝道のひとこまを記述して、主イエスが礼拝で説教するお姿を通してより具体的に神の国の到来を宣言しているのです。

5 最初の説教

主イエスがお読みになった「預言者イザヤの書」は、イザヤ書第61章一節以下の言葉です。「**主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、／主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、／捕らわれている人に解放を、／目の見えない人に視力の回復を告げ、／圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである。シオンの故に嘆いている人々に、灰に変えて冠をかぶらせ、嘆きに変えて喜びの香油を、暗い心に変えて賛美の衣をまとわせるために。**」(イザヤ61:1～3)。

当時の会堂の礼拝では、聖書を読んだ者が、自分が読んだ聖書の言葉について説き明かし、説教をしていたようです。人々は、なぜ主イエスがこの言葉を読まれたのか、どのように説かれるのだろうか…と考えながら主イエスに目を注ぎ、その言葉を待っていたかもしれません。

21節、「**そこでイエスは、“この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した”と話し始められた**」。主はこのとても美しい、神による解放のわざを告げる言葉を朗読なさいました。そして、なんと言われたか。主の御霊が臨み、油を注がれて神のみわざを告げさせられた者、それはまさにこのわたしに他ならないと、語り始められたのです。

私たちも当時の人々と同じで預言者の言葉を読むのは好きです。特にこのような約束に満ちた言葉は美しく、素晴らしい。喜んで読みます。しかし、そこに、「いや神

の国の支配が来ることはないのではないか」という思いがどこかに潜んでいる…それもまた事実だと思います。喜びつつ聞きながらも、預言者の麗しい言葉の実現は、疑っているのです。現実では、神の国が、この世に来るなどあり得ないのではないか？と思っています。そんな日がいつたい来る事があるのだろうか…と。

しかし、主イエスは、そのわたし達の心に突き刺さるように告げられます。「今、ここに神の国はあります、何故なら、私がここにいるから」と。これほど大胆な言葉があるでしょうか。キリスト・イエスのみが語り得る言葉。「救いはもうここに来ている」。私たち人間の心にある思い、わたし達が生きているこの世の現実、神ならぬものの支配にさからって、主イエスはあえてそう宣言され伝道の業を始められました。

6 今日実現した

その言葉を少し詳しく見ていこうと思います。主イエスはこの時、「今日、イザヤ書のこの聖書の言葉は、あなたがたがこの聖句を耳にしたこの日に実現した、成就した」と告げられました。21節の原文を直訳すれば「この日に実現した、この聖句は、あなた方の耳のなかで」です。「この日に実現した」というのが文頭におかれ、強調されています。「実現した」と訳されている言葉、これは「完成される」とも「満たされる」と訳してもよい言葉です。

言葉は、語られただけであるならば満たされていません。「語られた言葉は内容が伴わなければ空しい」と、私たちも知っています。特に、美しいことを語っている言葉、勇ましい言葉は、美しければ美しいだけ、勇ましくれば勇ましくだけ、「そういう世界はいつ、どこにどうやって来るのか」という思いに駆られます。言葉が、言葉とは真反対の厳しい現実をつきつけ、私たちから希望や力を奪い去り虚ろにする…というのは私たちのよく知っていることです。

しかし、主イエスはそんな私たちの心、つぶやかざるを得ない私たち人間に対して、虚しい事を語ってはおられません。「ここで、今日、この言葉は虚しくなくなった、中身が満たされたのだ」と言われたのであります。

それ以上のことを、ルカ福音書は書いていません。「説き始められた」というのですから、これは主イエスの説教の最初の言葉であって、そこから先、言葉が続いたかのように思われます。しかし、明らかに、主イエスのこの日の説教の主題はこれに尽きています。これだけで十分なのです。だから続きは記されていません。

主イエスは、預言者イザヤの言葉、人々が聞きなれていたこの言葉の一字一句について解説して人々を説得しようとなさったりしたのではない。「この言葉の通りのことが今起こった、あなた達の耳の中でそれが起こっている」とだけ言われたのです。

言い換えれば、「この言葉を読み語っておられる主イエスご自身こそ、この言葉を満たすものに他ならない」という事です。その主イエスご自身の言葉を聴いて礼拝する場所で、すでに神による解放のわざが始まっている。あなたがたのために！私たちのために！

7 御霊の力によって

しかし、それは人の力では分かるものではありません。ルカによる福音書は、14節に、「イエスは御霊の力に満ち溢れてガリラヤに帰られて」と書きました。神の霊、神の生きた、力ある霊が主イエスにみなぎり、その主イエスにみなぎっている霊が、今、礼拝で働いておられます。預言者イザヤの言葉を選び、読み、これはここで実現したと宣言しておられる主において、霊における神の国の支配が始まっている。主はそれを告げておられます。そして、その主の言葉を聴く者に向かっても、御霊は働くのです。

ここに、私たちが今日、生きることを許されている、私たちの教会の礼拝が始まりを告げました。聖書がわかるとは、御霊の働きかけを受けて、「十字架で死に三日後に復活された主が生きて今、ここにおられる」ということが判るということなのです。

8 信仰告白

そうして私たちはどうなるのでしょうか？

皆が口をそろえて、力強く信仰を言い表すことができるようになるのです。一生懸命、心を注ぎだして信仰告白するようになります。使徒信条を唱えるようになるのです。信仰の告白とは、まさに告白。告白の相手がいます。誰でしょうか？それは、私たちの主イエスです。聖書がわかれば、私たちは、イエスに対して、「あなたはわたしを救ってくださるお方であり、私の愛する主人です。私はあなたを信じます」と心をこめて告白するようになるのです。

9 人々の背き

しかし、最初の礼拝のあと、実際に起こったことは何であったのでしょうか。ナザレ村の人びとは主を崖から突き落とそうとしたのです。まるで神なる御霊は無力であったかのようにです。神が無力であったのでしょうか。

いえ、そうではありません。まさに御霊に満ちた主イエスがそこに来られたことによって、礼拝に集っている者たちの真実の姿が明らかになりました。主イエスが幼いときから、一緒にしてこられた礼拝にひそむ深い問題、悲しむべき事実が明らかになりました。

この最初の教会の礼拝は、イエスを殺す思いを生んで閉じられました。恐ろしいことですけれども、遠い昔のことではありません。私たちに無関係な事でもないでしょう。

10 呼びかける主

その背く者たちに対して同じイザヤ書では、65章にこのような言葉を記しています。1節以下です。「わたしに尋ねようとしない者にも／わたしは、尋ね出される者となり／わたしを求めようとしない者にも／見いだされる者となった。わたしの名を呼ばない民にも／わたしはここにいる、ここにいると言った。反逆の民、思いのままに良くない道を歩く民に／絶えることなく手を差し伸べてきた。」

私たちが今、神がまるでおられないかのように思う時、神を問うことをやめてしまうような思いになる時に、尚「わたしがここにいる、ここにいるではないか」と、神ご自身が

私たちに呼びかけられるのであります。それが主イエスのなさっておられることです。しかし、そこにおいてもなお、人々の背きが深まります。

11 恵みの言葉を選ぶ主

そのイザヤ書65章を読み進めると、復讐、報復について語られております。イザヤ書61章、65章、いずれも同じ預言者イザヤの言葉です。ユダヤの国の人々が、いつまでたっても自分達の国が解放されないままに生きて、望を失いがちになったとき、尚、繰り返し望を新しくしようと励ました預言の言葉。

そのとき、自分達の解放が、同時に、この自分達の神に対して背く人々に対する報いや、神の民を虐げてきた者に対する復讐をも意味すると、考えたのは当然かもしれません。私たちもどこかに報いを期待します。どうして自分だけがこんな目にあるのか、どうしてあの人だけがよい想いをするのか、不公平だと思います。そこで、尚、公平が貫かれるべきであるし、悪い者には報いがなければいけないと、いつも思います。

しかし、神の報いは、私たち人間の思いをはるかに超えています。私たち人間のように独りよがりではない、全く公平に全く正しく行われる報いであります。そのような報いの言葉を預言者イザヤは告げ知らせたのであります。

ですが、正しい神の報復の言葉であっても、主イエスは、最初の説教でそれを語ってはられません。それはなぜなのでしょう。ナザレ村の人びとがご自分を殺そうとする民である事を主は知らなかったのでしょうか。

12 貧しい人々、囚われの人々

主はどのような思いでナザレ村の礼拝におられたのでありましょうか。自分が生まれ育った村のよく知った人たち。しかし、自分を殺そうとする人たち。彼らを前にして聖書の御言葉を取り次ぐ主の思いを推し量る事はできません。ですが、なおもこの主イエスの側を素通りにはできない思いにかられます。この時の主のお姿に目を凝らしていきたい、そのお声にのみ耳を傾けていきたいと思ひます。

主イエスがここで引用なさったイザヤ書61章は、「貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために」、「囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、打ちひしがれている者に自由を得させる」ために、神から遣わされる者が来ると告げています。貧しい者、打ちひしがれている者、囚われの者。

ここに、私たちがどうしても知らなければならない事実があります。主イエスがここで「貧しい者達、囚われた人達」と、聖書の言葉を読まれた時、誰の事を考えておられたのか？他の誰でもない、自分と共に礼拝するナザレの仲間たちのことをお考えになっていたに違いないという事です。そして、それは今、ここで礼拝を守っている横浜ナザレン教会のお一人お一人の事です。あなたのことであり、わたしの事です。

13 自分に気づく

そうです。「聖書が判るようになる」は、先ず、私たち自身の貧しさに、不自由に気がつくということです。乱暴な言い方ですが、敬虔な態度を取る余裕などないほどに、他人に同情する余地なんかないほどに、自分がどんなに貧しく、惨めて、囚われているかということに気が付くということなのです。

物質的に豊かであれば、かえってその根性は貧困になります。下手にもの考えることを知っていたり、知識を沢山持っているときに、それだけに、おごり高ぶる貧しさが現れる。その自らの知識、知恵に囚われて自由になることができません。知識がなくても同じことです。

お金がなくても、同じこと。やはり私たちは囚われています。「聖書が分かる」とは、その事に気づく、聖書が語る「罪人」「囚われ人」は自分の事であったのか…と気が付くことです。

ナザレの人々が、主イエスを殺す気になったのは、まさしく囚われていたからです。人間が囚われ不自由でいるという事は、主イエスを殺すという恐るべき姿を取らざるを得なくなります。心を閉ざされ、不自由になっている者は、それとは気づかずにそんな恐ろしいことします。

しかし、私たちが知るべき事はそれでは終わらない。殺そうとする者達に主イエスは、どう臨まれたのでしょうか。主イエスは、私たちの貧しさや囚われの一番深いところにある神に対する敵意に気づいておられた筈です。ですが、主は、報復なさを、きっぱりと拒否しておられます。唯一、人を裁く資格のある神の御子にも拘らず、報復するという選択肢を主はお捨てになったのです。だから神の報復を記したイザヤ書65章ではなくて、61章をお選びになり、伝道の業の最初の説教箇所とされたのではないのでしょうか。つまり、主イエスは、既にここで十字架への道を選ばれたのです。主は十字架の道を選び取られ、神の国の到来を告げ知らせました。

14 主イエスに栄光を帰する

さて、少し前に戻ります。15節に「**イエスは諸会堂で教え、尊敬をお受けになった**」とあります。この「尊敬をお受けになった」と訳されている言葉は、「皆から栄光を帰せられた」という意味の言葉です。礼拝で聖書がわかった喜びは、「私は聖書についての知識を得たぞ！」という傲慢をもって終わるようなものではありません。聖書がわかって初めて知るのは、己の困窮、貧しさ、虚しさ、欠けであり、その大きな困窮を満たすキリスト・イエスの豊かさです。聖書がわかって初めて思い知らされる自らの貧しさのなかで、主イエスに栄光を帰する喜びです。

その時、主の恵みの年、すべての者が解き放たれる時が告げ知らされます。自分の貧しさ、自分の囚われ、自分の罪から解放してくださる主の御心に適う時が始まるのであります。私たちのこの礼拝もまた、囚われからの解放の喜びのなかで主に対する賛美をもって終わりたいと願います。